

平成 20 年度第 1 回 AA 研フォーラム

日時：平成 20 年 6 月 5 日（木曜日）午後 3 時より 5 時

場所：AA 研 304 号室

セイリッシュ語：概説と研究動向

渡辺己（AA 研准教授）

本発表では、北米先住民諸語のうちの 1 語族であるセイリッシュ語族の概説がされ、なかでも発表者が現地調査をしてきたスライアモン語(コモックス語とも)に関する研究が紹介された。セイリッシュ語族は 23 言語からなり、比較言語学的研究も多くなされている。その成果をもとに、祖語に再構できる動植物名から、語族の故地は海岸側であったことが分かる。M. スワデシュが言語年代学の方法論を最初に適応したのもセイリッシュ語族であった。この方法論は、基礎語彙が一定の速度で自然に消失されていくという仮定を前提にしている。しかし、セイリッシュ語族の言語のなかには慣習として「忌詞 word taboo」をおこなうものがあり、すなわち人為的に語彙をなくしたり変化させたりしていた。したがって、スワデシュがこの方法論を確立するために選んだセイリッシュ語族は、はからずもその方法論の不備を露呈することにもなった。セイリッシュ語族の言語は文法的に「複統合的」と呼ばれるタイプであり、多くの概念をひとつの語にまとめ、他の言語では数語からなる文にあたる表現を一語で表わすことができる。さらに一般言語学的に興味深いのは、同語族の言語に品詞（特に名詞と動詞）の区別があるのか否か、長年議論されてきた点である。本発表では、この現象についてスライアモン語を例に、それがどのような言語現象であるか報告された。